

棕の道草 第35回 「鏡餅」

内田こでまり

お正月を迎える行事や飾りは、近頃は簡略になる一方で、鏡餅にはガラスや木でつくられたものがあつたりするようですが、それでもお餅（あるいはお餅様のもの）を年神様に供えてお正月を迎えるという風習は消えずに続いていますね。

この風習がいつ頃始まったものか、定かではありませんが、文献に記される最も古い例は、源氏物語の『初音』の巻なのだそうです。そこで、鏡餅がどのように出てくるのか、その場所を少し覗いてみたいと思います。

源氏は、『初音』の巻の前年に、四季の庭を配する四つの町を持った広大なお屋敷六条院を完成させています。それは、源氏にとって大切な四人の女君（紫の上、秋好中宮、花散里、明石の御方）を住ませるためのものでした。そして、『初音』の巻で六条院は初めての新年を迎えます。

正月一日、新春を飾る一番の舞台はもちろん紫の上が住む春の御殿ですね。そのお屋敷は、咲き匂う梅の香と御簾の内の薫物の香が入りまじり、さながら「生ける仏の御国」のようです。女主人の紫の上の姿は見えないようですが、優雅で嗜みのある様子の、紫の上つきの女房たちがそこそこに群れつどって、歯固めの祝いをしています。御簾の外からはよく見えませんのでこれは想像ですが、猪や鹿の肉とか大根、瓜といったものを食して長寿を願っているのでしょう。（歯固めは、もともと、延寿を願って、天皇がそうした肉や魚などを食する儀式でした）それから、餅鑑（もちひかがみ＝鏡餅）も取り寄せて、新年の祝い言など言い合っています。何しろ御簾越しのことですからはっきりしないのですが、女房たちの間に鏡餅は据えられて、それを見ながら祝い言を言っているのではないのでしょうか。女房の中には懐手をしている者もいます。寒いのですね。けれども、みな寛いで楽しそうです。

この後、源氏があらわれて、女房たちは慌てて身づくろいをしますが、覗き見はこの辺にしましょう。

ここに現れた歯固めと鏡餅、歯固めは物を食すことによって、鏡餅は供えることによって長寿を願うという別個のものでしたが。長い年月を経る中で、いつかそれが一つになり、やがて鏡開きをしてお汁粉などいただきながら健康を祈るというような姿になっていったのでしょうか・・・と書いておりましたら、郷子先生が涼やかなお声で「秩父の小豆で炊いたのよ」とおっしゃって、美味しいお汁粉を振る舞ってくださった日のことが浮かんでまいりました。そのような楽しい日が早く戻りますように、鏡餅の前で祈りたいと思います。